

# 羽州浜街道(1)

## 秋田から本荘までの浜街道

由利海岸に沿って久保田(秋田)から本荘や庄内方面に向かう藩政期の街道は、羽州浜街道と通称される一般的な浜街道であった。由利地方では、この浜街道を南下する場合は酒田街道と呼び、逆に北上する時は秋田街道と称していた。その後、明治12年(1879)の道路修繕規則によって「酒田街道」が正式の名称となったものである。

中世の由利郡は俗に「由利十二頭」といわれる小豪族が乱立した地域で、江戸期に入ってもさまざまな大名や旗本の領域に分断されていた。このような領地を南北に通るこの浜街道は、その名の通りかなりの部分が海岸の砂道を通るもので、汀線の後退により、現在は海中に没してしまっただ部分も少なくない。多くの村落は浜街道より山側に存在していた。



②

**久保田から松ヶ崎まで**  
久保田城下の北国街道出口は外町南端の馬口(まぐち)であった。ここは馬を乗り継ぐ伝馬町の性格をもち多くの旅籠(しゆくわ)が立ち並んでいた。馬口(まぐち)から西の川尻村に出ると、浄土宗蓮入院や総社神社があり、総社神社手前から旭川べりに出た。このあたりは藩の御蔵や川口番所があった所で、今も石蔵の小字名が残る。旭川と雄物川の合流点から少し下って、現在の新川橋上流あたりに渡し場があり、雄物川を越えると川沿いに南に進むと百



③

三段新屋村(秋田市新屋)となった。街道は現在の雄物新橋のやや上流あたりを南下し新屋の町並を通った。新屋表町から愛宕町にさしかかると左手に地藏堂があって、街道はそこから南西に砂丘を越え浜田中村に向かった。百三段は新屋の古名で、鎌倉時代初期から「吾妻鏡」などの文献にその名が現れる。

新屋浜から浜田にかけての砂浜では、藩政期を通じて製塩がさかんに行なわれ、塩釜の煙が絶えずたなびいていた。

浜田の中村を出た街道は滝ノ下集落を貫き境川で亀田藩領と接していた。佐竹氏が秋田に入った頃、百三段新屋村は最上領であったが、元和8年(1681)以降、境川以北が久保田領となり、先につづく桂根から石脇(本荘市)までは亀田藩領であった。元禄15年(1702)の亀田藩の領内図によればそのほとんどが海岸線をたどる浜道であったが、桂根から長浜間など部分的には山道もあった。

江戸後期の勤王の志士、高山彦九郎がこの浜街道を北上した時の記録「北行日記」にも「勝手、上荒屋、雪川、羽川、みな塩浜を行く」と書き残している。

御嶽山のある上新谷や勝手(岩城町)の集落周辺は、明治以降の酒田街道や国道7号、JR羽越本線が並行しているが、いずれも浜街道の内陸側にある。そしてまた内陸には集落を結ぶ古道もあり、勝手付近では「殿様道」も一部残されている。風雪の厳しい冬期間、あるいは幕府要人や藩役人など上級武士などが利用したものかと思われる。



④



⑤

### 松ヶ崎から古雪町へと

松ヶ崎は大野ともいい、ここからは衣川に沿って内陸の亀田城下に道が延びていた。海に沿った芦川や親川もまた塩焚き(製塩)がさかんで、この北国街道はまさに塩の道ともなっていた。今泉を過ぎ深沢、濁川を経て栗山を過ぎるあたりから、海岸の道と石脇に向かう北国街道に分かれる。街道は新山西麓を東南に向きをかえ石脇に入



⑦

た。石脇は子吉川をはさんで本荘藩と接し、一方では北国街道から分かれ芦川沿いに岩屋(大内町)方面に延びる街道の起点ともなっていた。そしてまた石脇は亀田藩領一の湊で、米蔵が立ち並ぶ御蔵屋敷もあった。大渡渡船場(現由利橋のやや下流)で子吉川を渡ると六郷領の本荘藩となったが、大渡は北国街道の要衝であった。本荘藩は六郷氏二万石の城下町で、亀田藩と並んで由利地方の中心地として栄えた。街道は、外町の中心となった大町から中町を通り、肴町から古雪町西端の浜ノ町へとつづいていた。



①柴の渡し

(秋田市川尻新川町)新屋豊町)旧雄物川と旭川の合流点のすぐ下流にあった。寛保期の絵図に(二丁五十四間)(約207M)と記されている。

②日吉神社(秋田市新屋日吉町)社伝によると大同元年(806)創建という。永治元年(1141)現在地に移転。鹿嶋流し行事でも有名。

③余楽庵(秋田市新屋日吉町)新屋生れの明治時代の篤農家森川源三郎が余生を送った秋田市上北手一見山の草庵を移築し保存している。

④長浜古戦場碑(秋田市下浜長浜)戊辰戦争の際庄内藩兵が長浜の海岸から国見山を越え久保田城下に攻め込もうとして秋田藩兵と戦った跡。

⑤亀田藩主岩城家御霊廟(岩城町赤平)曹洞宗龍門寺に残る岩城家代々の霊廟。秋田県指定重要文化財。山門と宝篋印塔は岩城町指定重要文化財。

⑥十返舎一九『方言修行・金草鞋』二十一編より本編は鶴岡から久保田、盛岡、恐山までの旅。松崎(本荘市松ヶ崎)の舟渡しの様子を描写。(秋田市個人蔵)

⑦親川の浜道(本荘市親川字向川)街道は向川集落裏手の海岸沿いを通っていたが、波による海岸浸食でほとんど消滅。時代により道は移動した。

⑧齋彌酒造店(本荘市石脇)明治35年の創業。店舗、米蔵などは国の登録有形文化財。この地は亀田藩の湊で番所や蔵屋敷があった。

⑨本荘城址(本荘市出戸尾崎1)別名、鶴舞城、尾崎城。慶長17年(1612)の築城で、土塁と堀の城であったが戊辰戦争の際自壊した。



⑥

亀田藩石脇(本荘市)以北、いちばんの村落であった道川は宿駅となっていたが、海浜を急ぐ時は立ち寄ることも少なかった。二古から松ヶ崎にかけても砂道で、ほとんど波に足を洗う道中であった。



⑧



⑨